



# なごや「聖歌」だより 11月号 '10

**"Qui Bene cantat, bis orat."** よく歌うものは二倍祈る。(福アウグスティヌス)

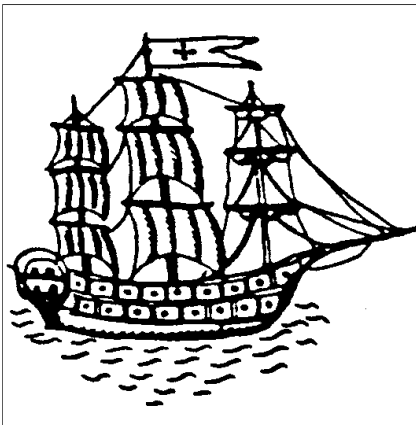
アウグスティヌスのことばとされ、欧米の聖歌研修会などで、技術的な向上、霊的な精進を促すことばとして開会の辞として用いられます。ところで「よく歌う」とはどういう意味でしょうか。歌が上手なことだけでないのは明かです。

正教会の場合、聖歌は礼拝と一体です。人々を神の国へ招き運ぶ教会という救いの舟の部材であり、航海を進める動力です。聖歌のことばは福音を掲げる旗であり、正しい方向を教える海図であり、大海を越える力を供給する燃料です。さらに航海を遂行するためには乗組員全員とのチームワークが必要です。

音程や発声の練習は材料作りです。「音のことや声の出し方に気を取られると、祈りが損なわれる」という意見もありますが、正しい発声は聞く人にとっても、歌う本人も心地よく、まわりの声と調和し、年を取っても歌いつづけられる方法です。

発声に限りませんが、人は知らず知らずのうちに自分流の癖を身につけています。皆それぞれ、生まれながらに神から美しい声を与えられてますが、十分活かし切れているとは言えません。自分の思っている「よい声」は実際は「悪い声」であることも多いのです。しかも自分ではわかりません。経験ある人の指導を受けて、指摘を素直に受け入れて努力しないと治りません。私自身も悪い癖を直すのに何年もかかり、今も努力中です。

内容の理解も準備の一つです。歌詞である祈祷文を、まず漢字交じりの原文で繰り返し読むことをお勧めします。楽譜のひらがなだけで読んでいると、とんでもない理解をしていることがあります。おおよげ「公」を「大焼け」、「



かみ神なり」を「雷」と聞いていたという笑えない話があります。わからないところは司祭に聞いてください。また、聖書の内容に親しむと、歌のことばがわかりやすくなります。ニコライ訳はすぐれた翻訳ですが、口語訳の聖書も併せて見ると理解が深まります。スティヒラやイルモス(カノン)など、歌がいくつも並んでいるものは、同じ内容を色々に言い換えていることが多いので、次の歌を参照すると意味がわかることがあります。

チームワークを育てるためには練習を重ねるしかありません。正教会の礼拝、特に主教祈祷は掛け合いが多いので、できる限り神品の方々も練習に参加していただくのが望ましいと思います。

最大限準備をして本番に臨みますが、聖歌をやっていて一番難しいと思うのが気持ちの集中です。「我が霊よ、主

を讃め揚げよ」と歌いながら、色々なことが気になって、心は別の所にさまよい出ています。「主憐れめよ」と歌いながら、何に対して「憐れみ」を乞うているのか、そんなことも忘れて口先だけで歌っています。我ながら情けない、二倍祈るどころか、半分以下です。それでも、教会の仲間と声を合わせて歌い、祈り、ご聖体を頂けば、不思議な暖かさに包まれます。

アウグスティヌスの別の言葉に「讃美を歌う者は、喜びのうちに讃美し、歌を捧げるその方を愛する。(ccl39)」があります。神は準備も心構えも不十分な私のようなものにも、喜びを与え、神を愛する気持ちを育ててください。「よく歌い、二倍祈る」のレベルに達するのは気の遠くなるような話ですが、一緒に歌い続けてゆきましょう。

聖歌練習

♪名古屋: 11月7日代式後、主日聖体礼儀後、そろそろ、降誕祭の練習を始めます。主日朝、9時15分頃から声出しウォーミングアップをしています。どなたもご参加できます。

♪半田: 今月はお休み

11月の指揮当番 21日 エレナ広石  
28日 ピーメン松島、

## ズナメニイ研究会

今月はお休みします。

クリュキー(記号)の復習をしながら、ズナメニイの記譜、音楽付けの特徴を学んでいます。テキストはリガで2002年に出版されたズナメニイの教科書です。

11月は司祭とマリア松島が休暇でセルビアとギリシアに旅行させていただきます。代式をよろしく願います。

11. キノニク 領聖詞

κοινοβικόν; причастенъ киноникъ

聖詠または、(まれに聖書の他の箇所)からの句で、メリスマ的な長い曲付けの「ア Rilイヤ」で終結します。繰り返して歌うこともあります。聖詠の句はその日のテーマに従って選ばれ、例えば五旬祭のキノニクは「願くは爾の善なる神は我を義の地に導かん、ア Rilイヤ」で、第142聖詠第10句から選ばれています。主日領聖詞は「天より主を讃め揚げよ」(148聖詠)です。信徒領聖中に歌われる「ハリストスの聖体を受け」はもともと復活祭の領聖詞でした。また大斎の先備聖体礼儀の領聖詞「味わえよ、主のいかに仁慈なるを見ん」は最も古い領聖詞とされています。

古代教会の時代には神品と信徒が一同に領聖していたので、領聖詞はまさに「領聖の歌」でしたが、次第に神品は信徒とは別に至聖所内で領聖するようになり、神品領聖の時間に歌う歌になってゆきました。領聖詞はその時間を満たすために、メリスマ(装飾)を加え、長く引き延ばして歌いました(右楽譜参照)。古い歌の写本を見るとキノニクは装飾的な歌唱を特徴とするコンダカリ表記\*で記されています。

近代以降合唱コンツェルトなど西洋的手法の多声音楽が歌われたり、イルモス、ステヒラ、その日のテーマに関係ない他の歌が歌われています。神品領聖の時間の歌については特にティピコンに記載がなかったために、宮廷作曲家たちの新作発表の場となり、聖歌隊が好きな歌を撰び、腕の見せ所の時間となる傾向がありました。最近のロシアでは、領聖詞を歌ったあと誦経で時間を満たすことも多いようですが、領聖へ昇りつめていく流れが途切れるおそれがあるかもしれません。

10世紀頃までビザンティンで行われていた手法で、誰でも参加できて時間を調整しやすい歌い方があります。主日領聖詞「天より主を讃め揚げよ」を簡単なメロディで歌い、間に148聖詠を句に分けて唱える、これを繰り返します。聖詠の句は「まっすぐ」読んでもいいし、「天より主を讃め揚げよ」と同じメロディにのせて歌うこともできます。ビザンティンではソロ歌手が聖詠を歌いましたが、名古屋では信徒が交替で読んでいます。\*コンダカリ表記:ビザンティンの大聖堂の流れを汲むメリスマ(装飾)の多い複雑な歌のために用いられた記譜法。

✠✠✠✠✠ Причастенъ въ недѣлю ✠✠✠✠✠

**ズナメニイの主日領聖詞。**  
+++ メリスマ的(装飾的)な歌い方の例 +++

各行とも歌詞の上にズナメニイの記号、歌詞の下にそれを五線譜に書いたもの。  
①から⑤行目までは「天より主を讃め揚げよ」Хва-ли-те с не-бесの各音節が長く引き延ばされて歌われている。⑥行目からはア Rilイヤの「ア——」が、なんと⑫行目まで引き延ばされ、装飾的に歌われる。歌手には特別の技量が求められた。

**ホームページのご案内**

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>  
詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 Liturgia <http://www.orthodox-jp.com/liturgia>  
奉神礼や聖歌の実践資料